

序文

誰しも人生において、師として、あるいは先人として意識する人がいることであろう。それは、幸せなことである。そして、そうした人が身近に接してきた人であればあるほど、「わが師・先人を語る」機会を持つのは、ちょっととした誇りである。しかし同時に、「わが師・先人を語る」ということには、何やら気恥ずかしさのようなものが付きまとうのを感じることも事実である。それは、「わが師・先人を語る」ということが、ただ師の卓越した業績や人格の素晴らしさを語るだけではなく、同時に、語り手自身の内面や成長の過程、ときには自分の未熟さをさらけ出すという面も持つからであるように思う。

この「わが師・先人を語る」という講演シリーズは、「偉人伝」とは異なる。つまり、優れた人の業績や人格を客観的に（あえて言えば、第三者的に）評価しようというものでは

ない。むしろ、その語り手が、対象となる人への思い入れや、その人からの教えを、気恥ずかしいまでに率直にさらけ出す。そこにこそ、「わが師・先人を語る」ことの意義がある。その意味で、本書は、語られる人と語る人とがともに奏でる協奏曲であると言ってもよい。

人は自然をはじめ、さまざまな事象や事物から学ぶことができるが、何より本質的であるのは、人と人との相互作用を通じての学びである。相互作用による学びは動物一般の属性として備わった本能ともいえるが、学びの相手を師あるいは先人として意識するというのは、すぐれて人間的な営みである。また、人間として、研究者として、あるいは作家などとしていかに優れた人であっても、「わが師・先人」として語られるときには、その人と共振できるだけの力が語り手の側になければならない。この講演シリーズで師あるいは先人として取り上げられている人たちは自身には、おそらく、師たろう、先人たらんと自ら意識した人はいないはずである。「わが師・先人」を生み出すのは、学び感じ取る側の力でもある。

こうした意味で、この書『わが師・先人を語る』に目を通して下さる読者には、その共振のプロセスにこそ面白さを感じ取っていただければと思う。もちろん、共振の仕方は実にさまざまである。一瞬の所作、一つの言葉にはつとすることもあれば、長い触れ合いの中ですで深い影響をじわりと感じることもある。「教えない」という教え方で学ばされることもあれば、手を取るようにして学びを受けることもある。また、出会いの初めからその人を師として意識することもあれば、時を経て後に師としての存在の重さに突然気づくこともある。

こうした師・先人には、どうやら共通する特徴があるように見える。それは、何より、自分が行っている研究にしろ執筆にしろ、あるいは組織の運営などにしろ、それを（やや妙な言い回しになるが）情熱的に楽しんでいる姿勢である。他方、語り手の中には誰も学びを強制された人はいない。むしろ、師・先人が自らすすんで楽しむ姿に接することで、周囲の人間が自然とそれにつられて自分も深く考え、その力や感性を磨き上げていく風景が、それぞれの語り手の言葉の中から浮かび上がってくる。それは、たんなる知識の継承や伝承といった平板な用語では表現し尽せないものである。

この序文では、師や先人という言葉の意味にはことさらに触れなかった。その解釈は読者によってさまざまであって良いと思う。一つのヒントは、この「わが師・先人を語る」というテーマの下に一連の講演会を主催した上廣倫理財団が考える、「倫理」というものの捉え方にあるであろう。それは、「人々がよりよい人生を送るために役立つ叡智やその実践」とされているが、その指針をとりわけて与えてくれたと感じる人を師あるいは先人と

して受け止めるのかと思う。本書において師や先人について語る一人一人が、いかなる叡智をどのようにして学び、感じ取っていったのか、また、それをどのように実践していったのか、そのプロセスの読み解きを楽しんでいただければ幸いである。

二〇一七年一月三日

濱田 純一

目次

序文

濱田 純一

1

濱田 純一 『銀の匙』の国語教師・橋本武先生と私

9

師とは？／先生の『銀の匙研究ノート』／私の大学生活と橋本先生の教え／
「学びを遊びにする」工夫／物語を追体験する授業／
「スロー・リーディング」の効用

久留島典子 日本中世史研究の先達・石井進先生と私

35

私の研究テーマ／先生との出会い／
「本郷に進学してくると、つまらなくなる」——石井先生の一言／

先生の御業績／先生から学んだもの

平岩 司枝 文学の師・長谷川伸先生と私

..... 55

新鷹会しんとうかい／初めての作文／戸川幸夫先生に弟子入り／
いきなり直木賞受賞、長谷川伸先生の門下に／
先生の入院、遺してくださった言葉／恩師なくば私はない

林 望 対照的な二人の恩師、森武之助先生と阿部隆一先生

..... 83

対照的な国文学教授・池田彌三郎先生と森武之助先生／
斯道文庫と阿部隆一先生／森武之助先生の人柄／
阿部隆一先生との出会い／書誌学とは／
一流の先生はじろっとしかにらまない／阿部先生の書誌学／
森先生と阿部先生に通じる肝心なこと

山極 壽一 二人の恩師の夢、今西錦司先生と伊谷純一郎先生

..... 131

二人の恩師と私の共通点／二人の生い立ちと関心の変遷／
今西錦司は極地法、伊谷純一郎は単独調査法／
時代の変遷によるフィールドづくり三様／師という背後霊／
二人の師の教えと私の研究／
二人の師が掲げた大きなテーマを未来につなぐ

位田 隆一 日仏の恩師、田畑茂二郎先生とシャルル・シヨール先生

..... 171

二人の師との出会い／フランス語に魅せられて／
国際法の基本目的の「平和」は、一人一人の幸福と福祉の追求／
田畑茂二郎先生の国際法／シャルル・シヨール先生の国際法／
私の「開発の国際法」／ユネスコの活動から生命倫理へ／
平和の意味をかみしめて

徳川 康久 わが先祖、慶喜様の人となり

..... 203

慶喜様とその家族／慶喜様の生涯／大政奉還の決断／

権現様の仰せのとおり／ユニークな將軍／新しもの好き／
明治時代の暮らしぶり

川淵 三郎 少年期と青年期の師、吉岡たすく先生とクラマーさん

私の信条／子供のことを第一に考える——吉岡たすく先生の教え／
スポーツマンとしての心得——クラマーさんの教え

231

あとがき

公益財団法人上廣倫理財団事務局

261